右之條々申分在之輩者、爲公事錢銀子一枚宛可持參候。但理運之手前は銀子可返遣者也。

慶長十八年八月十二日（六イ）

四　作事方之儀御定

御定書

一、作事方、先奉行人之外當奉行申付候作事入用もくろみ、大工三人申渡相極、目錄先奉行佐久間彌右衞門・稻垣三丞裏書裏判仕、當奉行手前に請取置、其目錄之通當奉行人致手形、會所者裏判を以材木奉行方より請取可申候。若追々入申材木在之者、右三人之者令相談、重而目錄相調、同前可致沙汰事。

一、作事方入申諸道具請取渡、可爲同前事。

一、先奉行佐久間彌右衞門・稻垣三丞致切手請込候材木其外諸道具、一ヶ月分之致目錄、會所に可相渡候。并當奉行人に遣候目錄之寫、會所に可遣之候。手前に茂請書可仕置事。

一、作事相濟次第、當奉行人會所に可遂算用事。

一、材木奉行人手前より、作事場其外諸方に相渡候材木之分、一ヶ月宛帳面相極、會所に可相渡事。

一、繩・こも・藁・葭・竹針・かすがい・屋根葺、何も會所にて一ヶ月宛可令算用事。

一、於宮腰材木買調候樣子、如跡々可申付事。

一、右之材木買申分、并宮腰より當地指越材木之帳、奉行人方より毎月內藤清兵衞方に渡置可申事。

一、宮腰材木出し申刻、奉行人方より內藤清兵衞方に相斷、內藤下代出し相改、彼地出可申事。

右定所如件。

寬永十三年十一月十三日

會所中

五　駄賃・傳馬之儀御定

御定書

一、拾五匁　江戶下道上下之駄賃銀。但八人に付一疋宛に而、一疋に付百二十目之宿り。

中納言樣江戶御下向之刻傳馬被下覺

一、御茶堂三人に三疋。

一、ミち・少仁兩人に二匹。

一、御料理人七人に七疋。

右之通被下候。

六　臺所入用米・宿々夫傳馬等之儀御定

定

一、代官所收納米之內七百石、臺所爲入用、野木江五兵衞・清水權六方に、奧村因幡守以裏判可相渡也。米右兩人令相談可入念事。

一、右米七百石雜穀藏に納置、欠米百姓に不可懸。此外扶持方にも可相渡事。

一、宿々在々夫・傳馬之儀、無油斷可相改。若夫・傳馬僞申懸者於有之者、其人或屆置、或とらへ、安房守・山城守・因幡守方に可相斷事。

一、一ヶ年に兩度村々相越、百姓共無油斷農作相勤候之樣見計、荒地於有之者、大豆・麥・稗之類開作候樣に可申付事。

一、諸百姓出銀家一間に三匁宛可申付。右員數猥不懸申樣可入念事。

一、村々肝煎等公役并給人、用所之外金澤に出し候儀、堅可令停止事。

一、百姓共無故見立檢地申請候事可停止。無見立不叶時分は、算用場に權右衞門書付可出事。

一、見立檢地之者於遣之者、權右衞門罷出令相談、見立相極上帳面加判、百姓等にも見立帳可渡事。

一、納所口米如定、其外同宿々用所申付、每歲爲扶持米二十石可宛行事。

右之條々不可有違背者也。

寬永十四年二月十九日

靑木權右衞門殿

定

一、代官所納所米之內八百石、臺所爲入用野木江五兵衞・清水權六方に、奧村因幡裏判を以可相渡也。米右兩人令相談可入念事。

一、米八百石雜穀藏に納置、欠米百姓不可懸。此外扶持方